

Title	戦力論：その静態的考察
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.5 (1943. 5) ,p.373(1)- 414(42)
JaLC DOI	10.14991/001.19430501-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学教授 加田哲二著

日本經濟新論

B 6 四〇六頁
口 繪 八頁
賣價 二圓七〇錢
送料 二〇錢

前篇 近代日本の經濟的發展

全國民の旺盛なる敢闘精神と、優秀なる兵器と、長期戦に耐へ得る經濟力とを戦争に勝ち抜く爲の三要件とすれば、經濟力の高度の組織化こそは我が當面の根本的な課題である。本書はこの使命に應へんが爲に、我が經濟の全體的な理解を目指して先づ近代經濟の一般的傾向を取上げ、次で日本經濟の近代的發展を説く。維新以後昭和初期に至る發展史……事象の流れを求め、本質を把握し、そして現代の理解に至る大路が茲に拓かれたのである。

目要容内

第一部、近代經濟の本質 基本社會と經濟……經濟社會の發展……近代の經濟……現代の經濟的傾向……
第二部、近代日本の經濟的發展 序論……日本社會の特質……新經濟への基礎工作……明治十年代の經濟……日清戦争時代の經濟状態……日露戦争時代の經濟状態……歐洲大戰當時の日本經濟……世界大戰後の經濟……恐慌生産組織の高度化……資本の集中と財閥……
附録、参考文献

三田學會雜誌

第三十七卷

第五號

戰力論

——その靜態的考察——

加田哲二

- 一 戰力の要因
- 二 戰爭の性格の進展と戰力
- 三 現代戰爭の性格
- 四 戰爭における武力の地位
- 五 軍構成の基礎
- 六 動員可能量の制約
- 七 經濟戰力との關係
- 八 資源問題
- 九 軍における精神力
- 一〇 國民における精神力
- 一一 思想戰
- 一二 戰力としての自然

戰力論

(三十三)

慶應出版社

東京市芝区一丁目一八五番一號
電話三五四七(45)田三
〇八一八五

戦争を遂行するためには、力を必要とする。戦争は、これを保持発展せしめる國家全體の力によつて遂行せられる。従つて、戦争の遂行を可能ならしめる力には、種々なものがある。これを大別して、物理的並に精神的な力とすることが出来るであらう。

戦争の目的は、相手方たる敵國の意思を、何等かの形態において、壓服して、自國の意志を、そこに實現するにある。そこに戦争目的が設定されなければならない。戦争が、いはゆる防衛的戦争であつても、また攻撃的戦争であつても、目的が設定される。防衛戦争と攻撃戦争との區別は、一見困難である。なんとなれば、最良の防衛は、攻撃にあるからである。いづれにせよ、戦争は、戦争目的を持つ意志の所産である。従つて、戦闘的精神が最初に存在し、または形成されなければならない。

かゝる戦闘的精神が形成せられ、それが現實に實現せらるゝためには、戦争または戦闘の遂行者がなければならぬ。廣義における戦闘の遂行者または手段として考へられるものは、軍そのものである。軍は、兵員、兵器、組織から成つてゐる。戦争の遂行に當つては、軍が最も重要な要素であることは、いふまでもないところである。かゝる軍は、戦闘的精神と物的戦闘力とのみことな集成結合があつて、戦力の基本を構成する。

軍における組織としての將兵は、戦力の負擔者、實行者であり、これによつて、戦力は戦場において、發現せられる。従つて、將兵は、戦力の綜合者である。この綜合は、軍組織と武器とを集成したものである。組織としては、人的要因としてみられ、これによつて、動かされる兵器、武器は、一つの戦力の集成である。前者が、能動的活動者であるに對して、後者は受動的な存在である。かゝる受動的な存在としての兵器の集成は、物的戦力を現はすもので

ある。むしろ物的戦力としての兵器は、たゞ、活動的組織力としての將兵を通じてのみ、その力が發現され得る。

戦争の遂行に當つて、軍が最重要の要因があることは、既に指摘したところであるが、軍の發揮し得る戦力——精神的並に物的なるもの——の綜合としての——は、國家全體の力によつて、條件づけられねばならない。第一に、軍の組織においては、(イ)總人口、(ロ)總人口における男子壯青年者の割合が、これであり、物的戦力については、(イ)一國の經濟發展の程度(ロ)その中における軍事生産の占め得る地位によつて、限定される。更に重要なことは、戦争に對して、國民がいかなる態度を採るかである。

これらを綜合して觀察するところに、戦力の判定の基礎が與へられる。しかもなほ、戦力發現の條件は、かゝるものゝみでなく、自然的要因をも數へなければならない。戦争は、ある領域において行はれるものである。戦場がこれであるが、その戦場の形状・地位・氣候・戦場への距離は、戦力の實現にある條件を與へるものである。さういふ意味において、戦争領域は、自然の一部ではあるが、防衛軍にとつては、戦力——消極的ではあるが——の一部を形成し、攻撃軍にとつては、戦力の發現を妨害せらるゝものであるから、戦力消耗の一原因として考察すべきものであらう。

二

戦力問題は、戦争の性格が進展して、その規模の擴大従つてまた消耗の増大によつて、緊急化して來た。戦争は、いかなる場合においても、國力の問題と關聯するものであるが、それが一國の力の一小部分を消耗するに過ぎない場合には、大きな問題ではない。古代・中世・近代を通じて、大戦争がなかつたのではない。國を擧げて戦ふやうな戦争も、歴史の上には、珍らしくはない。たゞ、戦争の遂行者である國家そのものは、近代にいたるまで、十分な

發展を遂げることが出来なかつた。國家の包含する人口、その持つてゐる政治の組織並に經濟の運営は、いづれも小範圍に局限されてゐて、一國家が戰爭のために滅亡するにいたることがあつても、それは、直ちに從服國によつて、處理され得るやうな簡單な場合が多かつた。しかるに、近代に至つて、國家は、民族的國家として發展して來た。その特長は、廣汎な領域における多數の人口を支配するところにある。さういふ近代的國家と國家との戰爭は、自然大戰爭に發展せざるを得ない。これを促進したものは、戰爭技術上の革命である。火藥の進歩・大砲・小銃の發展が、これである。このことは、騎士の戰爭を民衆の集團的戰爭に進展せしめてゐる。戰闘専門家としての騎士・金城湯池を誇つた領主の城塞を、農民兵・傭兵のために擊破せられ、火藥の前には、單なる石塊の集積に過ぎざるに到つた。しかも、近代初期の戰爭は、その物的戦力の基礎としての經濟的技術の未發達によつて、いはゆる大規模戰爭に發展して行かなかつた。

勿論、ヨーロッパにおける近代初期から第十八世紀中葉にいたるまでの戰爭は、着々大規模戰爭への基礎を作り上げてゐた。それは、戰爭の内外に對する意味においてさうであつた。

戰爭の對内的意味においては、騎士戰爭から民兵または傭兵制への進展である。騎士戰爭は、中世的手工業に照應する。甲冑の美、刀劍の精、これは均しく中世的手工業の産物である。かくのごとき手工業的産物の供給は、その小規模生産のために限定されてゐる。しかるに、民兵または傭兵は、集團的組織に持つものであるから、そのためには、巨大な武器・服裝などの供給を前提としなければならない。かくて、ゾンバートが、その著「戰爭と資本主義」で、指摘してゐるやうに、規格統一的大量生産の出現を促す重要な要因を形成するに至る。

このやうな大量生産制が確立せらるゝに至つたのは、産業革命前後における技術の發展のためである。手工工場

制への手工業からの發展、更らに、その機械工場制への進展によつて、大量生産の問題は、解決されて行く。それと前後して、ヨーロッパにおける兵制上の變革は、國民軍の形成である。國民軍は、その基礎を國民全體の上に置いてゐる。常備の兵または、義勇軍的性格を持つ民兵に對して、國民軍は、すべての男子國民から徵募せられる。この兵制の實行者は、ナポレオン・ボナパルトであつた。フランス革命は、單に政治機構を、國民的基礎の上に置いたのみでなく、政治における獨裁者ナポレオンの出現によつて、軍の常備國民化が行はれた。

ナポレオンは、常備國民軍を健全な財政の上に置かうとした。戰爭に必要なものは、金・金・金であるといふ言葉は、ナポレオンのいつたところであるといはれてゐるが、かれは、また、次のやうな言葉を發してゐる。「國庫はすべての基礎である。」「國家は戰時においても、平時におけると同様十分國費を賄ひ、租税の前拂にすぎない公債の手段によらず、戰費を支辨するのでなければ、國庫を有してゐるといへない。」「ナポレオンは、平時から戰時への財政準備の必要を認識し、租税と公債への健全な政策の必要を感じてゐた。一八一〇年十二月、煙草國營令の冒頭には、次の言葉を加へてゐる。

「予は、常に國庫に意を用ひ來つた。大帝國の國庫は、不時の場合に備へる手段を有してゐなければならず、最も重大な戰爭にも新しい課税なくして、賄ひ得るやうでなければならぬ。新課税は、その施行の初めの中は、餘り收入を期待出来ないものである。

最も進歩した國民は、かゝる場合の唯一の非常手段は、よく計畫された公債であることを知つてゐる。しかし、この手段は不健全であると同時に不幸である。未來の世代の人民に前以て賦課することであり、現在の人民が最も尊重する所のかれらの子供の幸福を犠牲にする。この手段はまた公共の組織を漸次消耗し、次世代の罵言を招

くものである。

吾々は、他の原則を採用した。吾々は平時人民に殆ど負擔をかけない多くの課税が必要である事を知つてゐる。

即ち税率は、僅かしか高められず、之によつて、國家危急の際の國庫をすべて支辨し得るからである。」(戦争、政治・人間——ナポレオンの言葉——柳澤恭雄譯)

ナポレオンは、かやうに、國家の戦時に對する計畫を進めてゐる。自由放任主義の修正による産業の保護奨励、財政制度の確立、國營事業による國家收入の増加を計り、もつて、戦争に備へてゐた。この時代においては、一方に産業革命が進行しつゝあり、他方に國民常備軍が建設されつゝあつた。この二つの基礎の下において、ナポレオンは、そのヨーロッパ征服の戦争を實行した。この戦争において、問題となつたところは、いかにして、戦争に所要の資金を獲得するかであつた。即ち、産業革命による經濟の發展は、市場に多量の財貨を供給し得るに至つた。問題は、これを獲得する資金である。従つて、當時の、またその以後の戦争經濟は戦争財政の問題として提起せらるゝに至つたのである。當時公債論が、經濟學の論議の對象となつたのも、このためであつた。この傾向は、ナポレオンの没落、英帝國の確立によつて、大規模戦争の跡を絶つに至つた第十九世紀の戦争を支配するものであつた。戦争は、以前にもまして、戦争資金の問題として考へられてゐる。

三

第十九世紀のヨーロッパを通じて、このことは事實として現はれてゐる。第十九世紀初期の産業革命を通じて、増大された生産物は、輕工業であつた。しかるに戦争資材は、重工業的なものにおいて重要である。この方面における生産は第十九世紀の後半において發展してゐる。先進經濟國としてのイギリスにおいて、その資本主義の重工

業化の行はれるに至つたのは、西曆一八七〇年代に屬してゐる。比較的産業革命の遅延してゐたドイツにおいても、重工業の發展は、イギリスに續いてゐる。

かゝる重工業の發展を基礎的事實として戦争の様相が變化してゐる。一方において、隣接する國家の利益の對立によつて、それぞれの國民的基礎において、戦争が行はれた。普佛戦争(西曆一八七一年)のごときものが、その代表的なものであらう。他方において、イギリスの世界的帝國は第十七・十八世紀において、オランダ・フランスの闘争における勝利によつて成立した。一八一五年のナポレオン没落後におけるウィーン會議は、イギリス世界帝國のヨーロッパ諸國の承認であるといふことが出来る。しかるにイギリスは、その植民地的領域を増大しつゝあつたが、爾餘の諸國も、植民地の要求を提起し來つた。近代初期の商業帝國主義は、こゝに轉じて、工業帝國主義を發生せしめた。この戦争はヨーロッパ列強に對する後進諸領域の國家に對する問題であると同時に、この問題を繞つての諸列強間の闘争である。

列強間の闘争は、近代的商業帝國主義としての植民地戦争に現はれてゐるが、第十九世紀の後半から、これを更に大きな規模と性格とにおいて、擴大再生産せらるゝに至つた。このことを可能ならしめるものは、(一)列強の生産の増大と國內販路の狭小化による國外販路の追求、(二)交通機關——汽船汽車の發展である。

この闘争が植民地獲得競争の可能性が存する間は、酷烈の程度において大なるものではない。第十九世紀の後半におけるアフリカ内陸地帯の分割の可能性のあつた時代のごとき場合である。即ち一八七〇年代において、アフリカ面積の一〇%が分割されたのみであつたが、一九〇〇年にはその九〇%が分割された。かゝる犠牲領域の狭小化は、植民地的分割から植民地の再分割の問題を惹起せしめる。この問題は純然たる強大國間のことである。戦争は、

その性格において酷烈たらざるを得ない。第一次ヨーロッパ戦のごときが、これである。

第一次ヨーロッパ戦争の重要性は、三つの點において現はれてゐる。

第一、戦争の参加國の数の多いことである。西紀一九一四年の勃發當時から一九一九年の休戦にいたるまでに参加した國家は、數十に及ぶのであるが、そのうち中央ヨーロッパ側においては、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、聯合國側においては、イギリス、フランス、ロシア、イタリア、日本、アメリカ合衆國などの世界の主要國がある。これらの諸國は、戦力としての工業生産力に富んでゐることである。

第二、この戦争が世界戦争の様相を呈するに至つた理由は、世界争覇戦であることである。西紀一八一五年のウィーン會議によつて確立され、その後において發展したイギリス帝國は、第十九世紀の後半において、名實ともに世界帝國であつた。世界帝國としての大英帝國は、存続百年にして、挑戦されてゐる。挑戰國は、ドイツである。ドイツは、第十九世紀の後半において、急激に發展し、その富力において、また工業力において、イギリスに追いつかうとしてゐる。殊にドイツの重工業の發展は、すさまじいものがあつた。第十八世紀の後半から第十九世紀の初葉にかけて、イギリスとフランスとの間に世界制覇の戦争が行はれてゐる。この戦争は、國民的政治革命と産業革命とを、その基礎に置いてゐる。いまや、第一次世界戦争としてのイギリス對ドイツの戦争は、發展しつゝあつた金融と重工業とを、その基礎に置いたものである。植民地の再分割が、その重要目的となつてゐることはいふまでもない。

第三、戦争の期間の長期に及んでゐることである。それは、一九一四年の勃發當時から四年三月の時日を経過してゐる。この期間は、歴史の上に記録されてゐる長期戦争、たとへば、百年戦争・三十年戦争・七年戦争・十字軍といふやうなものに比較すれば、時間的には、長期といふことを得ない。しかしながら、同盟側、聯合國側合せて、七千萬以上に上る動員と戦争の酷烈性とは、前古未會有のものであつた。戦線の擴大もまた豫想外のものであつた。

かくのごとき戦争を遂行するためには、從來のあらゆる戦争の經驗以上のものを必要とした。それは、戦争の進展に應じて、總力戦の様相を呈するに至つた。從來の戦争は、戦争を遂行する資金の問題が第一に提起せられたが、いまやその問題とともに、戦時需要を充足するための國家の全能力を活用することが問題となつた。資金は、需要を喚起するが、その資金は、甚しく巨額なものであつた。この需要を充足するためには、國家並に國民の全能力を活動状態に置かねばならない。それは、全國民の總動員を意味する。單に、戦争行為のためのみでなく、その行為を支持繼續するために、動員されねばならなかつたのである。そのゆえに、わたくしは、第一次世界戦争を、總力動員戦争と呼ぶ。この戦争においては、國民は、それぞれの地位において、また特に軍需的産業の方面において、激勵せられ、動員されてゐる。軍需への集中的動員が行はれたのであるが、いまだその編成替は大規模に行はれてゐない。

今次の世界戦争は、第一次世界戦争よりも遙かに大である。それは、ヨーロッパにおける戦争と東亞における戦争とが、アメリカ合衆國の挑戰的政策によつて、合一的に世界戦争に進展したものである。ヨーロッパ戦争並に、東亞戦争の経緯を冷静に觀察すると、アメリカ合衆國の世界制覇政策と大英帝國の帝國維持政策とが顯著に動いてゐる。勿論、その間に、ドイツの膨脹政策、日本の興亞政策が存在し、ソ聯の共産的世界政策がある。それらの本質は、こゝでは問題とする餘白を持たないが、それぞれの立場において、鬭争しつゝあつたことは事實である。こ

の事實に對して、米英の世界覇政政策は、これを妨害し、抹殺しようとしてゐた。そこに戦争の原因がある。

かかる根柢の深い戦争であるがゆえに、戦争の目的も明確であり、従つてその酷烈な戦争の遂行、規模の廣大性は、第一次世界戦争を凌ぐものがある。しかも、これに参加しつゝある諸國は、既に戦争を豫想して、少くとも六七年前から戦争準備に懸命であつた。この點において、第一次世界戦争との顯著な差異がある。第一次世界戦争においても、多少の準備は、なされてゐたが、その準備は狭少に過ぎてゐたやうである。しかるに、第二次世界戦争においては、戦備それ自體が、巨大なものであつた。國家の全面に渉る戦争準備が行はれたのである。

戦争は大規模であり、酷烈たらざるを得ない。戦争の目的からも、また戦争の準備からも、さういふことが出来る。しかもなほ、戦争それ自體が目的ではなく、それは單に手段であるから、一定の限度があり得る。勿論、クラウゼヴィッツのいふやうに、戦争は一度で勃發すると、それ自身の論理によつて動くものである。而して、この論理は、戦力の基礎によつて、條件づけられてゐる。

四

戦力は、戦争の基礎である。わたくしは、戦力を分つて、精神力と物力とし、これに加へるのに、國家並に軍の組織力をもつてした。如何なる國といへども、弱小の軍をもつものは、戦争に耐え得ない。これは、戦争における軍の絶對的必要性を語るものである。

現在の戦争は、總力戦または全體戦争であるといふ見地から、あらゆる社會的並に國家的現象に「戦」の一字を添加して、これを羅列して、全體戦争または、總力戦争の意義を了解してゐるのかのとき主張をなすものである。それは、恰度、物質を構成する原子を羅列して、その物質の本質を知り盡してゐると主張するやうなものであつて、

もとより素朴な見解に外ならない。それほど甚だしくないものでも、總力戦争の形態として、武力戦・經濟戦・思想戦・外交戦などを掲げることが、常識となつてゐる。さういふ戦争の形態は、存在するものであるから、それを擧げることが、差支ないのであるが、たゞ、それを並列せしめて、現代の戦争を理解してゐるかのやうに考へるものがあるならば、大きな誤りであらう。

全體戦争または總力戦争においては、武力戦の外に、經濟戦・思想戦・外交戦が存在することは事實である。たゞ、そのありかたは、單に並列的ではない。それは、すべて戦争目的従つてまた國家目的によつて序列が與へられる。まづ、外交戦によつて、武力戦以前に、戦争目的と同一なものを到達することを努力するであらう。これは、外交交渉に外ならない。この外交交渉は、ある場合は武力以外の實力行使に伴はれる。相手國のある階層・民衆に對する宣傳工作のごときが、これである。その場合宣傳戦ともいはれ得る。また、平和裡に實力的効果を與へる經濟的手段がある。不買、不賣政策のごときがこれである。大東亞戦争開始以前の一年數ヶ月の合衆國の日本に對する政策の種々相は、その最も明瞭なものである。

しかしながら、武力戦の開始——通常戦争の勃發であるが——によつて、これらの外交戦・經濟戦・宣傳戦が終了してしまふ譯ではない。武力的攻勢と同時に、和平提唱を行ふことは、支那事變の過程においても、あつたし、英獨戦争においては、双方ともに試みてゐる。武力を伴ふ經濟戦は、封鎖・通商破壊戦がある。短波によるラヂオ宣傳・航空機による文書の投下による宣傳戦が行はれる。これらは、戦争においては、武力戦を主體として、それとの共同において、統一された目的のために、行はれてゐる。

これらの戦鬪の諸形態は、戦争目的によつて、統一されて行はれる。しかも、戦争の進展を最も促進するものは、

武力戦である。外交戦・思想戦・経済戦は、武力戦に従属するものでもなければ、武力戦の擔當者によつてのみ指導されるべきものではないが、それは、孤立的に行はれるものでもなければ、行はれてはならないものである。それらは、すべて有機的關聯において、遂行されなければならないのである。

従つて、戦力とは、これらのすべての形態の戦争を遂行する力をいふのである。戦争が、敵の力を撃滅するにあり以上、そのために、最も重大な關係を有するものは、武力である。武力とは、組織された人的並に物的暴力である。こゝに組織されたといふのは、軍組織をいふ。軍組織は、(一)將士(二)兵員(三)兵器交通具の綜合的組織を意味する。従つて、武力とは、單なる人的要素でもなく、また物的要素でもない。それは、實に兩者の綜合された力である。

軍組織の第一要因は、將兵である。複数の將兵なくして、軍隊は成立しない。軍隊を構成し、これを認識せしめるものは、常に一定量以上の人間集團である。このことは、陸軍においても、海軍においてもいひ得るところである。而して、一定量以上の人間集團としての軍の持つ特色は、それが武器を持ち、戦争目的のため、これを行はせることである。従つて、兵員と武器の綜合としての力といふことが出来る。軍自體の武力としての戦力は、兵員數と武器の利用度によつて決定せられる。各種兵員の割合と武器の配分は、戦闘の性質に従つて、決定せらるべきものである。たとへば、匪賊討伐のごとき場合——輕裝備を必要とする——と文明國の軍隊——これは重裝備をしてゐる——とに對する場合は、異なる武器裝備を必要とする。これらは、戦闘技術に關することであるから、それに對して關說することを省略しなければならない。

五

こゝで、われわれの必要なことは、さういふ戦力としての軍の構成の基礎となるものは、何かの問題である。まづ一般の兵員であるが、これは、一國の壯丁數によつて決定せられる。壯丁とは、普通概念に従へば、十七八歳から四十五六歳までの男子である。軍隊を構成すべき人的要素の總數は、この數によつて規制せらるゝ。女子軍も存在するが、いまだその戦力としての價値が確定されてゐないから、軍は男子の構成すべきもの、しかも、以上の年齢層のものから形成されるものとみてよい。そこで、この年齢層の男子の全人口に對する割合が、問題となつて来る。

全人口の半數は、女子である。従つて、男子は、全人口の五割を形成する。十七八歳から四十五六歳にいたる男子數はこの全男子數の五割を占めるものとみてよいであらう。全人口中の青壯年層を、十五歳から四十九歳までと限定する場合には、アメリカ合衆國においては、二七%(一九三五年)ドイツ(一九三八年)およびイギリス本國(一九三七年)は二六%イタリア(一九三六年)およびフランス(一九三六年)二四%を持つてゐるから、この年齢層を全人口の四分の一(二五)%とみることは、大過ないことである。これが、一國の純正な意味においての兵力供給源であるといつてよい。たゞ、植民地・屬領を持つ國は、この外に、大きな供給源を持つことになる。第一次世界戦争の場合において、イギリス並にフランスは、インド、諸植民地屬領、北アフリカなどの青壯年人口を戰場に送つてゐる。イギリス本國(大ブリテン島)の全人口は、四千七百四十萬(一九三八年)屬領におけるアングロ・サクソン人二千四百九十萬に對して、非アングロ・サクソンとしての植民地屬領原住民は、四億四千九百六十萬に及んでゐる。フランスは、本國人は四千二百萬、植民地原住民七千萬に達してゐる。ベルギー、オランダの合計人口は、千七百萬に對して、植民地人口は七千七百萬に達してゐる。ドイツは、オーストリア、スデーテン地方、チエコの占領保護

領化によつて、ドイツ人口は九千萬に達してゐるが、植民地人口は、皆無である。かういふ事例からみると、軍への兵員供給源として主として考へられるものは、本國人口であり、植民地屬領の場合は、この總人口に對して、極めて僅かな割合だけしか、供給源としての數量を持つてゐない。

一國の全人口の四分の一が、兵力供給源として考へられ、それが全部動員せられる場合、兵の量の極限に達するのであるが、それは普通の場合可能ではない。この全人口の四分の一の男子人口は、有閑人口ではなく、一國の最も重要な生産労働力を形成するものだからである。従つて、この壯丁層を全部動員する計畫は、單に机上の數字案としてのみ考へ得られる。普通の動員は、まづ常備現役兵は行はれ、次に豫備兵に行はれる。従つて、年々この常備兵を多量に有し、その服役期間の長いものほど、多量の兵力量を持つことになる。豫備兵期間を四十歳までと定めるならば、四十歳までに死亡した兵役終了者が、現役兵の外に、兵員供給源として考へられる。次に未教育豫備兵(國民兵を含む)が兵員供給源である。

これらの兵員供給源は、常備軍百萬、服役年限三年とすれば、年々約三十四五萬程度の壯丁を兵營に送らねばならない。三年後には、豫備兵が、三十四五萬づゝ形成せられる。この豫備兵が、四十歳までとすれば、全豫備兵の員數は約五百萬と推定することが出来、動員可能量は六百萬とみることが出来るであらう。これは大體の計算であつて、精密なものではない。

六

扱て、この動員可能量が、現實的動員量として、實現するためには、二つの條件が必要であつて、そのいづれを缺いても、有力な軍を形成し得ない。

第一、軍の組織の方面から制限である。それは、軍組織の性格に由來する。すべての組織が、さうであるやうに殊に軍は、一つの嚴格な秩序組織である。統帥は、最高の命令權者から、一貫して、最下の兵員にまで達しなければならぬ。この命令によつて、軍は行動する。しかも、この命令は、組織的階層を通じて、下達される。この任務を行ふものが、軍における特徴である。軍の構成並に行動は、正規軍においては、將校によつて、なされる。便衣隊のごときものでも、若干の指揮者が必要とする。この將校は、軍人として特殊の教育を受けなければならない。他の領域の職能人が、さうであるやうに、軍人としての將校は、特別に養成されねばならない。大戦争を展開する場合、住々にして、將校の數的不足を嘆じなければならぬことは、戦争の形態・規模の變化とともに、殊に動員量の増加の場合、しばしばである。將校は、士官學校あるひは兵學校出身の本來の軍人と、義務兵役の服役者から選抜せられて、將校に昇進するものとあるが、兵員の増加のやうに容易になし得ない。それは將校の上級命令者としての權威と戰鬪遂行者としての技術的役割の二つの面からしかるのであらう。さういふ場合においては、一般兵員の供給源がなほ豊富でありながら、將校の不足のために、動員し得ないことがあり得る。

第二は、更に重要なものである。第一の將校の問題は、指揮者としての多少の能力を犠牲とするならば、將校を急造することは、不可能ではない。たゞ、さういふ軍は、實力の發揮出来ない低い戰鬪力と規律の整はない軍隊に化す虞れが十分にある。第二の問題は、軍の戦力に對する絶對的條件である。それは、所要量の軍隊に對して、十分な整備を與へ、戰鬪を繼續せしめるだけの軍需要を充足し得るか否かの問題である。

このことは、直接軍に關係することではなく、戦力を形成する生産力の問題である。生産力は、一國の經濟發展の段階如何によつて異つてゐる。低度文化の社會、封建的國家、近代資本的生產の機構を持つ國家の間では、大

な差異を持つてゐる。労働の組織と技術の發展が、このことを實現せしめるのである。生産力は、資本的生産の採用の結果甚だしく増加してゐる。アダム・スミスのいふやうに、「われわれが、やゝもすれば、極めて簡易な仕度だと誤認する程度の仕度を、文明國における最も卑しい人々になさしめるためにさへ、數千の人々の援助と協働が必要であるといふことがわかるであらう。いふまでもなく、彼の仕度を以て富者の非常な豪奢と比ぶれば、ひどく簡易に見えるに違ひない。けれども勤勉にして、質素なる百姓の人の仕度は、一萬の裸の野蠻人に對して、生殺與奪の絶對權を有するアフリカの王様のそれに優ること萬々である。この差に比ぶれば、ヨーロッパの王様の仕度の農民のそれに對する優越の如き恐らくはいふに足りない。」(國富論第一篇第一章大内兵衛譯)文明國の生産力は、それ以前のものに比して、多大な發展を經過してゐる。それゆゑに、わたくしが既に指摘したやうに、第十九世紀の戦争の經濟的側面は、戦争資金の問題であつて、戦争のために生産が特に考慮されたのではなかつた。

しかるに、第一次世界戦争は、その様相を變化せしめた。わたくしは、その様相の變化を、戦争の酷烈性といふ言葉で表はしたい。それは、戦争が大規模化すると同時に集約的となつて來たのである。このことは、當時までの生産の増加が、これを可能ならしめたものである。この生産の増加が、戦争の一つの重大な原因ともなり、戦争の酷烈性を實現するにも至らしめたものである。いま、第一の問題にも關係があるから、第一次世界戦争の全期間における動員數を記して置かふ。

中央同盟國の動員兵數

ドイツ	一三、二五〇、〇〇〇
オーストリア	九、〇〇〇、〇〇〇

トルコ	一、八〇〇、〇〇〇
ブルガリア	一、〇〇〇、〇〇〇
計	二五、〇〇〇、〇〇〇

聯合國の動員兵數

ロシア	一九、〇〇〇、〇〇〇
イギリス	九、四九六、三七〇
フランス	八、一九四、五〇〇
イタリア	五、六一五、〇〇〇
ルーマニア	一、〇〇〇、〇〇〇
バルギ	三八〇、〇〇〇
セルビア	八〇〇、〇〇〇
ギリシア	四〇〇、〇〇〇
ポルトガル	五三〇、〇〇〇
米 國	三、八九九、七〇〇
日 本	三〇〇、〇〇〇
計	四九、〇〇〇、〇〇〇
兩者合計	七四、〇〇〇、〇〇〇

この動員數をみると、ヨーロッパの主要参戦國においては、總人口の一割から二割程度に達してゐる。ドイツの

例をみれば、動員数は千三百二十五萬に達してゐるが、當時のドイツ總人口六千五百萬に對して、約二割である。イギリスの九百五十萬にあつては、單に本國人口からのみではなく、自治領兵並に、インド兵を包含してゐるから、本國人口の四千萬餘に對しては、約二割であらう。かやうな高率な動員は、高度の工業國でなければなし得ないところである。單に兵器の生産のみではなく、高い國民の經濟的蓄積があつて、始めて可能である。この蓄積が、軍事需要に轉化されて行くのである。いづれにせよ、人口の一割を動員し得る國は、世界の一流の工業國である。それ以外の國では、これに對して十分な援助をなし得る同盟國、または借款許容國がない以上、不可能である。たとへば、第一次ヨーロッパ戦争においては、ドイツはオーストリア・ハンガリーを援助し、トルコ・ブルガリアを救援したのであつて、ブルガリア・トルコは自力をもつて、戦争に参加することは、出来なかつたのである。今次の世界戦争においても、第一次世界戦争におけると同じやうに、アメリカ合衆國の軍事生産力の反樞軸側に對する意義は、大きなものであるといはねばならない。

七

現在の戦争は、従つて、高度工業國の戦争である。高度工業國とは、次のやうな條件を持つものである。

- (一) 生産の高度の機械化
- (二) これに照應した熟練労働力
- (三) 石炭・石油・電力エネルギーの十分な存在および利用
- (四) 鐵・銅・輕金屬の豊富な供給
- (五) 交通機關の高度化

樞軸側においては、日本並にドイツ、反樞軸側においては、米國・イギリス・ソ聯が工業國としての資格を持つてゐる。この高度工業國としての程度が顯著なものが、最高度の動員をなし得る。それは、工業の機械化によつて可能である。この生産力を強度の戦力にまで高める他の要因は、國民の食糧生産に於いての自給率の如何である。この自給率の高い國は、高度の安心をもつて、その工業生産力を直接の戦力に振り向けることが出来る。しかるにイギリスのやうに、その食糧の三分の二を輸入に仰いでゐた國は、まづその輸入路の確保のために、戦力を割かねばならない。イギリスにいたる制海權の確保が、これであるが、そのためには、海軍力の多くの部分を消極的防衛の用具として用ゐなければならぬのである。ドイツのそれは、イギリスの輸入依存に比しては、低度であつて、約二五%であり、戦前におけるナチスの政策は、自給度の高揚化に努力してゐたし、また戦争後において、ポーランド・デンマーク・オランダ・バルカン地帯の占領は、その點を改善したかに考へられる。問題は、生肉・乳製品・脂肪である。従つて、戦争への條件としては、高度の工業生産力と、これと同時に高度の農業生産力とであるが、工業が農村人口の労働者化によつて行はれてゐる以上、この兩者の實現は、甚だ困難なことといはねばならない。さういふ點から、戦争しつゝある國においては、可能である限り、自給自足政策の樹立に努力しつゝあり、このことは、多大の労働力を必要とするので、兵員動員は、かくのことき經濟的條件によつて、規制せられざるを得ない。現在の戦争において、ドイツが、前大戦よりも動員兵數が少く、約一千萬と傳へられてゐるのは、戦争經濟の見地からは、健全であるといつてよいであらう。

戦争の當初の動員に對する裝備は、戦備の蓄積によつて賄はれる。戦備の蓄積は、何處の國においても行つてゐるが、それには、直接的蓄積と間接的蓄積がある。直接的蓄積は、服裝・彈藥・兵器・燃料・食糧の蓄積である。これ

は、軍當局が、將來の戦争に備へて、ある程度まで、計画的に蓄積する。そして、動員の開始とともに、この蓄積から所要のものを使用するのである。この蓄積は、兵器のやうに變化發展するものについては、大なるものであることが出来ない。戦場において、敵側の兵器に對して、能率の低下してゐるやうな舊式のものを使用することが出来ないから、その場合は、常に、研究を行ひつゝ、世界殊に假想敵國の兵器の進歩を考慮しつゝ、兵器の改良を計り、あるひは新兵器の考案を行ひつゝ、最新最良の形態のものゝ生産力を蓄積保持して行くことである。「影の工場」といはれるものゝ建設、または少量の教育注文を民間工場に對して行つて置くときは、これである。これは、戦争の接近あるひは、その勃發と同時に、直ちに生産力として、多量生産の可能な形態を探らねばならない。アメリカ合衆國、または、ドイツの軍用航空機を生産力のごときは、この種の形態の最も顯著なものであらう。

たゞ、戦争に際しては、動員、または交戦の結果としての損害破壊などのために、生産力の轉換または、その増強は著しく困難を伴ふものである。従つて、ある程度までの蓄積は、是非とも必要である。この蓄積を強調する學者に、ポツニー(今日の戦争)がある。しかしながら、戦備のストックは、一應退蔵であるから、それだけ、再生産過程からは、脱落する。従つて、それらのものが、生産的に消費される場合と異つて、生産資本の減少となるから、生産は縮少とならざるを得ない。一國の經濟中、平時並に戦時において、軍需並に民需の割合が問題となるのは、これである。民需は、ある場合においては、軍需への迂回生産的役割を演ずるものであるから、そのみを壓縮すれば事足りるやうに考へることは、無謀である。一國の經濟は、比較的長い期間について、一定量のものであるから、その一定の生産物を、如何に、處理するかは、長期戦、短期戦のごとき戦争の様相から判定されねばならないものである。そこには、軍の統帥者と經濟の指導者との間に、完全にして賢明な協調が行はれることを必要とするであらう。

するであらう。

いま、高度の工業國において、總人口の一割を動員すると假定する。總人口八千萬とすれば、その内譯は、次のごとくである。

男	子	四〇,〇〇〇,〇〇〇人
女	子	四〇,〇〇〇,〇〇〇
男子人口中の動員年齢層		二〇,〇〇〇,〇〇〇
動員數		八,〇〇〇,〇〇〇
殘存數		一二,〇〇〇,〇〇〇

この場合、常備軍を一百万とすれば、動員は七百万である。一百万の常備軍は、常に産業労働から除かれてゐる數である。新しく七百万の動員が行はれる。この場合、七百万はその殆ど大多數は、各種の産業労働力として役立つてゐたものであるから、その國の經濟界は、七百万の労働者の缺陷を生ずる。これを以前の狀態にまで填補するものは、四十五六歳以上の有閑男子、十七、八歳以上、四十歳位までの女子であらう。而して、八百万の軍隊を支持しその戦闘を可能ならしめるために、軍需労働者を兵員一人につき、五人と計算すれば、四千万の労働者を必要とする。従つて、殘存青壯年齢層を千二百萬と計算するとき、二千八百万の労働者が必要である。この部分が填補數七百万の外に二千一百万を必要とする。従つて、有閑または遊休労働者の動員のみでは、不足することとなり、男子並に女子労働者の配置が問題となつて来る。従つてかゝることは高度の經濟的發展のない國においては、絶対に不可能であるといふべきである。そこに近代戦における兵員動員の最も強大な規制的要素がある。

八

ある程度の技術を前提とする一國の工業力を規制するものは、第一には、労働力である。このことは、既に、記述するところがあつた。兵力量と労働力量とは、兵員、労働者といふ關係においては、同じ給源から獲得するものであり、従つて、そこに、ある比率が存在せねばならない。この比率は、兵員一人に對して必要とする軍事産業労働者の所要量によつて決定せらるゝものである。ポツソニーの「今日の戦争」においては、この比率を第一次世界戦争の場合のアメリカについては、一對十七としてゐる。今日の戦争においては、豫想せらるゝところは、ヨーロッパの大國においては、一對十八であらうとしてゐる。この計算は、やゝ過大に陥つてゐるやうに考へられる。正確な計量に基づくものではないが、われわれは、これを一對六一〇とみてよいのではないかと思ふ。従つて、兵員並に労働者の配置の問題は、戦争の遂行にとつて極めて重大である。この問題は、単に量のみでなく、質の問題としても、重視されねばならない。緊急必要労働者を軍へ動員することは、経済的にみて不利であるが、現代の高度の機械化部隊は、重工業労働者を兵員として、歓迎することは、普通である。この場合にも、戦力の基礎としての工業と直接戦力としての軍との必要は競合することとなつてゐる。

産業労働者の給源としては、單に自國人口のみが存するのではない。敵國捕虜の利用、同盟國または被征服國労働者の移入のときは、既に行はれてゐるところであるが、このことは、自國民との比例を失してまで行ふことは、自國のためにも、また被征服國のためにも出来ないところである。従つて、軍の給源の大本が自國または本國人口にあると同じく、産業労働者の給源もさうである。

軍事産業の遂行のための、また戦力實現のための要件として、食糧生産の重要性については、既に記述するところ

があつた。而して、軍事産業それ自體の運営と安全化のためには、その原料問題がある。自國內において、原料が獲得し得る場合は、敵側の多少の爆撃を受けたとしても、その地帯が占領されない限り、軍事産業の運営に大きな打撃を加へ得ない。しかしながら、原料の全部を、自國領内、殊に運輸の安全性を確保し得る自國領内において、供給し得る國は、世界において存在しない。さま、主要國における重要原料について、表示すれば次のごとくである。

品目	單位	イギリス	帝國領	ドイツ	イタリア	ソ聯	合衆國	世界
原 油	百萬トン	—	六・八	一・二	〇・一	二八・九	一七・九	二七・七
ガソリン	同	〇・五	二・五	一・五	〇・五	六・三	六・七	—
黒炭・無煙炭	同	二四・三	六八・九	二〇〇・〇	一・〇	一五二・二	四四・四	一、一五七・五
褐炭	同	—	七・七	二〇・〇	一・三	—	—	二七・〇
鐵 鐵含有量	同	四・三	五・七	四・〇	〇・五	一五・〇	五・三	二七・〇
銑・鐵 合金	同	八・六	三・九	一五・八	〇・九	一四・七	五・七	一〇五・〇
銅 鐵(銅含有量)	千トン	—	五八・三	三三・〇	〇・六	三・五	七・三	三三・八
銅 (製鍊數)	同	一六・九	四七・二	七〇・六	二・九	九・五	八・〇	三三六・〇
ボーキサイト(原鐵)	同	〇・七	三九・九	九三・一	—	二五〇・〇	四三・〇	—
アルミニウム	同	二三・〇	六・〇	一六・〇	二・五	四九・〇	一三・八	—
亜鉛(鐵含有量)	同	七・七	五七・五	一七・三	八七・〇	七〇・〇	五八・二	—
錫	百萬キントナル	—	一三・五	—	〇・一	八・四	四・一	—
羊 毛(粗毛)	千トン	五〇・〇	二〇・六	三三・一	一五・九	一三・六	二〇・六	一、一八〇・〇
羊毛(生毛)	同	—	六・〇	—	—	—	—	一、一五八・〇

これらの數字は、第二次ヨーロッパ戦争勃發以前のものである。この戦争の世界戦争への進展によつて、軍行動によつて、占領されたところもあり、従つて今日においては、原料支配についての關係は、相違を來たしてゐる。米英側においては、南洋領域の支配または利用權を喪失してゐるし、樞軸側にあつては、アフリカ大陸の植民地を失つてゐる。しかしながら、原料分布の大體の傾向は、この表によつて、窺ひ得るであらう。この表の示すところは、第一に、原料資材の偏在である。原油のごときは、ソ聯と合衆國に偏在してゐる。銅のごときも、英米ソ領を多量に産出する。ゴムのごときは、イギリス海峡植民地の特産であるが、いまや日章旗の支配下に置かれてゐる。全體としてみると、イギリス帝國は、資源の豊富を示してゐるが、それはもとよりイギリス本國のそれではなく、植民地屬領におけるそれである。この場合輸送距離と安全性が問題となつて來る。資源の不足に悩む代表的なものは、イタリヤであらう。良好の状態にあるものとみられるものは、米合衆國である。しかも、この國においても、完全は期することは出来ない。ゴム、錫・マンガンのごとき重要物資の不足は、覆ふことが出来ないところである。このための苦慮は、アメリカの參謀本部の資源觀に現はれてゐる。戦略的資源の重要視がこれである。

戦略的資源として、米國の參謀本部が擧げてゐるものに、十四ある。それは第一級、第二級、第三級に分けられる。

第一級の戦略的資源とは、全然外國に依存して代用の不十分なもの。アンチモニー・マンガン・ニッケル・キニーネ・生絲・クロム・マニラ麻・水晶・ゴム・錫。

第二級の戦略的資源とは、國內の生産の不十分を填補するために輸入を必要とするものである。これには雲母・水銀・クシグステンがある。

第三級には國內において大體間に合ふ代用品があるが、尙ほ輸入品の方がよいといふやうなもの、即ち椰子油の

ごときものがそれである。

この外に、米國の參謀本部は、單に戦争のために必要とするばかりでなく、國民の生活のために、是非なくてはならぬものを十五ばかり擧げてゐる。アルミニウム・石綿・コルク・黒鉛・皮革・沃度・パンヤ・阿片・光學用レンズ・石炭酸・プラチナ・タンニン原料・ツオール・バナジウム・羊毛・これである。

大東亞戦争によつて、かれらが南洋地帯を失つたことは、この苦惱を、一層甚だしくしてゐるところである。

原料は、戦力經濟の基礎を形成するものであるから、戦争の遂行に對して、重要である。それゆゑに、またこの問題は戦争の重大な原因の一つとしても考へられる。このことは、原料問題の戦力としての重要性を示すものである。フォッシュ將軍の言葉として、戦場における一滴の石油は、一滴の血に等しいといふのは、端的に、戦力としての原料の重要性を語るものである。(これらの點に關しては、拙稿原料問題について、三田學會雜誌第三十六卷第八號を参照せよ)

九

以上論じたところは、人的並に物的戦力の量の問題である。量の問題は、重要であることはいふまでもない。量そのものが一つの力だからである。しかしながら、その力を眞實の力として發現せしめるものは、單なる量ではない。殊に人的戦力の場合においては、精神力が大きな問題として、立ち現はれる。このことについて、ナポレオン・ボナパアルは、次のやうにいつてゐる。

「銘記すべきは、兵士の數は全く問題でないといふことである。そして、また將校および下士官が指揮することを會得したときのみ、兵士に若干の期待をかけ得るといふことである。予が大軍隊組織の成功を勝ち得たのは、二

ケ年間たえず訓練された軍隊がプロオニエの營地においてであつた。(一八〇七年)
また、いつてゐる。

「二人の兵士を作り上げるのに六ヶ月を要するといふのは、誤謬である。吾々は僅か六ヶ月では軍隊を組織することが出来ない。ジエマブの戦場で九千のオーストリア軍に對し、フランス軍は五萬の大軍を擁してゐた。最初の四年間はフランス軍は實に笑止な方法で戦つてゐた。この戦争において、勝利を博したものは、新しい募兵ではなかつた。経験のある古い部隊が勝つたのであり、そのすべては、フランス革命の時、前線に残された退役兵であつた。新しい募兵は、或は逃亡し或は死亡して了つた。その中の若干のもののみが残存して、時を経てよき兵士となつたものである。ローマ人はどうしてかくも偉大な事業をなし得たのであらうか。それは一人の兵士を作り上げるために、ローマ人は六ケ年間教育したからである。三千名よりなるローマの一軍團は優に三萬の軍隊に匹敵した。予は一萬五千の護衛隊を率いて、四萬の大軍を打ち破つた。予は新しい募兵をもつて、戦争することは、十分慎んでゐる。(戦争・政治・人間)ナポレオンのいはんとするところは、「兵士の數よりも、精神力こそが、勝負を決定する」といふことがある。勿論、このことは、絶對的命題と解することは出来ない。相當な鬪志の敵方にある場合、顯著な數の差は、精神力をもつて、如何ともなし得ない。また優秀な機械的攻撃力を前にして、精神力を過大に評價することは出来ない。精神力も、ある限定を持つべきことはいふまでもないが、さういふ前提においても、精神力は重要である。

鬪争的精神と忍耐力のない軍隊は、たとへ優秀な機械的攻撃力を持つてゐる場合でも、それを有効に使用し得ない場合が多い。軍隊の訓練が重要視せらるゝのは、こゝである。而して、軍の精神力は、最高統帥者の命令が、最

下末端といたるまで厳正に實行されるところにある。そのためには、軍は、ある一點に精神力を集中してゐなければならぬ。軍の精神の凝集中心點が必要である。その最も重要視されるものは、國君または國家に對する將兵の忠誠心である。この忠誠心によつて、將兵の行動が指導され、動かされる場合、軍は「絲亂れない規律の下にある。ナポレオンが「兵士の第一の特質は、誠實と規律であり、勇氣は、第二義的たるにすぎない」といふ所以である。

而して、かゝる忠誠心を涵養するものは、一國のよき歴史的傳統と、よき統治と秩序であり、戦争における目的の明確性、その大義名分である。そのことのために、盡忠報國の精神を發露し、命を鴻毛の輕きに比して、慨然死に赴く精神を保持し得る状態である。この状態は、精神的には、最高のものであるが、ヨーロッパのごときあつては、必ずしも、さうではない。ナポレオンは「われらの軍隊は何故ヨーロッパにおいて最強であるか。それは最もよく組織されてゐるのみならず、更に最もよき衣食を供給されてゐるからである」といつてゐる。この言葉に従へば、ナポレオンの軍隊は、組織と衣食の優良性によつて、支へられてゐるものである。このことは、ナポレオンが、ヨーロッパ大陸を席捲し、ワテレルロウの一戦に敗れて、セント・ヘレナ島に淋しい晩年を送るに至つた重大な原因の一つであつたといふことが出来るであらう。軍の精神の凝集點が、「よき衣食」にあつたからである。従つて、それが不可能となるとき、その軍は、崩壞の前夜に置かれるといはねばならない。

軍の給與の優秀性は、軍を保持する一つの要素であることは、確かである。しかしながら、それが精神の凝集點であつてはならない。それは、單に軍の能率化のためである。軍の精神の凝集點は、歴史的傳統としての國家國君の名譽であり、戦争目的に置かれねばならない。わが皇軍における「陛下の軍隊」といふ觀念は、最もよくこの凝集點を形成してゐるものであるといふことが出来る。悪戦苦闘も、困苦缺乏も、かゝる精神的凝集によつて、克服せ

られて、輝しい戦果を擧げてゐる。

かゝる美事な精神的凝集點を持つてゐるからこそ、その軍隊の指揮者は、精緻な用兵作戦と親切な兵の取扱が要望される。そこに、ますます輝ける精神力を發揮し得るからである。そして、かゝる精神力を、最も有効な兵器によつて裝備することこそ、その戦力をますます發揮せしめるものであり、且つ敵側の軍隊に對する思想宣傳に對して擁護するものである。

一〇

戦力としての精神的要素は、軍に軍に對してのみ要求せらるゝものではない。それは均しく國民一般に對しても要求せられる。何となれば、ルーデンドルフもいふやうに、國民と軍とは密接不可離の關係にあるからである。

「軍隊は、國民の中にその根を持つ。要するに、國民を形作る一部である。従つて、總力戦における軍の強弱は國民の肉體的經濟的および精神的強弱に左右される。就中、精神力は、非常な長期に互る戦争に際し、國民維持のための生存闘争において、必要とする團結力を軍および國民に與へるものであり、この團結はまた國民存亡のためにこの種の戦争に最後の決を與へるものである。惟ふに今日何れの國家も軍の裝備や訓練を等閑に附してはゐない。而して、たゞ精神的團結のみが、國民をして戦時悪戦苦闘の中に在る軍に終始新たなる精神力を注入し、軍のために盡し、戦時の苦難の中においても、將また敵の戦争行爲の下においても、自ら必勝の信念に燃え敢然として、抵抗を繼續させるのである。」(國家總力戦 間野俊夫譯)

何ゆえにかくのごときことが主張されるのであるか。

「吾々は敵の意志を打破し、戦後においては、戦争の惨狀に堪へ、その後方においては、たとへ敵の占領地域内に
おいても、敢然これに反抗せんがために、數ヶ月、數ヶ年に互り敵に對抗して至大の力を發揮し得、凡らゆる危険を認識し、且つ戦争の永續とともに、ますます發生し易き種々の疑惑に對しても、精神的にも、肉體的にも毅然たる強力な國民を必要とする。蓋し總力戦は一步も假借しない。總力戦は、男にも女にもその極限を要求し、男子を、その目標とするのみでなく、夫や子を危険の地に出してゐる婦人にも直接指向せられるからである。」(同上四九頁)

このことは、戦線の領域的擴大においてみることが出来る。從來帶狀の領域を戦線として形成せしめてゐたが、航空機の發達は、これを航空機の航續可能の半徑にまで押し擴げてゐる。戦線は、軍の對抗においては、今日においても、なほ帶狀の領域を形成してゐる。しかるに、戦争は、この領域を越へて行はれてゐる。戦線においては、あらゆる兵器の攻撃を受けねばならないが、それ以外の場合には、主として、航空機による攻撃である。従つて、攻撃の量と質とは、異なるものゝ、今日においては、前線、銃後の區別は、殆んどあり得ない。特に一國が戦争に對して、最も有利な地理的條件にない場合の外は、それは常に攻撃の可能性に爆されてゐる。従つて、國民一般に對して、戰場にあるの精神が要求せらるゝのは、當然である。

國民一般に對して、武力的攻撃の可能性が存するばかりでなく、精神的攻撃の可能性は、常に存してゐる。宣傳戦、思想戦と稱するものが、これである。宣傳戦・思想戦は、主として敵國に對して、交戦國が、相互に行つてゐるものである。敵國民に對する宣傳戦・思想戦は、その國民の精神的思想的崩壊を目指すものである。そして、戦力の國民的基礎を腐蝕・動搖・崩壊に導かうとするものである。その實際的手段は、短波ラヂオの放送・文書宣傳・宣傳者の潜入・航空機による文書ビラの撒布などがある。その目標とするところは、次のごときものであらう。

一 民族對立要求の激成、第一次世界戦争の場合、英佛米側が、中央ヨーロッパ諸國に對して行つた宣傳は、民族自決主義であつた。この宣傳は、中央ヨーロッパ諸國のやうに民族的に複合國家であり、その對立の激甚であるところにおいては、有効であつた。中央諸國の崩壞の一半の原因は、こゝにあつたといはねばならない。現在の世界戦争においても、米英側は、大東亞戦争に關して、白人對有色人種の戦争であることを宣傳し、樞軸側の足並みを攪亂しようとしてゐる。また相不變民主主義的民族自決主義の宣傳を行つてゐるが、効果は擧つてゐない。

二 國內不平不満の激化、生活・政治などの状態に關する眞實もしくは虚構の言葉を流布して、國內の對立を激化しようとするものである。戦時生活の窮屈化は、國民に深く認識了解せしむることを要する。

三 戦闘の結果に關する虚構の宣傳、戦果を誇大に宣傳し、國民に厭戦思想を養成し、士氣の沮喪を招来しようとするものである。この點において、わが大木熱の發表の正確性が、世界的信用を博してゐることは、強味であるし、眞實は、最良の宣傳であるといふ命題を證據立ててゐる。

四 國內における相手國に對する同情の獲得である。親米・親英論者などといふものがありとすれば、さういふ分子を育成發展するために敵國があらゆる工作をなす場合である。

かくのごとき國家内部の攪亂は、現に戦争において、敵對しつゝある國家間においては、不可能であるかのごとくである。短波ラヂオの聴取は嚴重に禁止されてゐる。郵便交換の方法も存在しない。人を派することは、素より不可能である。しかしながら、宣傳は、あらゆる手段を通じて行はれる。最も普通に行はれるところは、中立國人の使用である。而して、そのためには、莫大な費用を惜まないものであるから嚴戒を必要とする。

これらの思想戰に對處するためには、國民をして確平たる精神力を保持せしめねばならない。國民の精神的凝集點は、既に軍の場合に指摘したと同様である。國君、國家に關する歴史的傳統、名譽の思想である。これを根幹として、國民團結の強化を徹底するのである。

一 政治的團結の強化、政治的對立としての政黨のごときものの解體、一國全體の組織化即ち國民政治組織である。ドイツの場合においては、ナチ黨、イタリアの場合においては、ファシスタ黨である。いづれも、一國一黨の獨裁を實現してゐる。わが國は、これと異つて、一君萬民の翼賛體制がある。米英は、なほ政黨組織を維持しつゝあるが、大統領または首相の獨裁化的傾向は、顯著に現はれてゐる。

二 社會的共同一致、國民の生活の窮屈化は、戦時において、不可避である。このために、國民的團結の弛廢するやうな傾向は、嚴に警戒を必要とする。アメリカ合衆國における炭鑛夫の罷業のごときは、既に解決したやうであるが、戦時においては、最も不利な行動である。わが隣保班制度は、實質的方面においては、團結強化の意味においては成功してゐるといはねばならない。

三 思想指導または思想戰に關する適切な方策がある。

二

直接戦力をもつてしない國內攪亂政策は、思想戰として考へられてゐる。思想戰には、積極的に敵國に對して行ふものと、防衛的に思想攻勢に對處するものとなる。従つて、これを表示すれば、次のごとくであらう。

- (イ) 積極的思想戦
 - (ロ) 防衛的思想戦
- (一) 敵國の思想崩壊を目標とするもの
 - (二) 中立國の思想動向を工作することによつて、自國側に立たしめるもの
- 思想戦
- (一) 敵國思想攻勢に對處するもの
 - (二) 敵國側の中立國工作に對處し、これを是正するもの
- 教育的思想戦
- (一) 國內における思想確立政策

この積極的思想戦・防衛的思想戦・教育的思想戦は、それぞれ孤立的に存在するものではない。相互に有機的關聯に立つものである。かゝる有機的關聯において、最も重要なものは、自國における思想的統一である。これなくして、積極的・防衛的・教育的思想戦のいづれをも、徹底的に實行し得ない。そこには、中心點がないからである。一度、かゝる中心點が、實質的に確立されれば、この中心點を旋廻點として、思想戦の種々相がそれぞれ、その處を得て活動することが出来る。従つて、まづ自國における思想の確立である。一國は、その歴史を持つてゐる。即ち、その發展と、發展によつて、達することの出來た段階とがある。この發展の經過の中に、興隆衰退の時期もあつたであらうが、その國としての存立の理由を持つに至るであらうし、また國としての發展の方向を定め得るに至るであらう。その方向を、現在置かれてゐる地位と力とによつて、計量熟考して、出て來るものが、國是ともいふべきものである。一國の思想には、さういふものがなければならぬ。また一國には、その建國の當初から一つの高い理想を持つてゐる場合がある。さういふ場合においても、その高い理想が、歴史の段階段階において、顯現した形態があつたであらうし、また現在の段階において、持つべき形態が考へられる。理想は、常に抽象的形態で存するのに對して、歴史的現實は、その具體的形態を要求する。さういふ具體的形態において、高い理想は、始めて一

つの政策または體制へ實現化される。

それが國是の具體的形態である。従つて、それは、一國の置かれてゐる歴史的時期と、その存在の世界的地位の考量によつて、決定されるものである。一國家の理想または大方針が、これである。國是とは、これであり、その國是の個々の現象形態的政策への適用が、國策である。國是従つて、また國策も、單なる思ひつきではない。

この國是の理論體系が、國民の指導思想である。この理論體系は、その國家の歴史並に哲學を根柢とし、現實的には、政治・經濟・社會の一切の諸科學の眞の綜合の上に建設されねばならないものである。而して、それは、内に對しては、民族の生命を躍動せしめ、外に對しては、自國の理想・理論・行動を是認せしめる力を持つことを要する。さういふ性格を持つ理論體系は、作つたものではなく、成つたものである。少くとも、長い歴史的發展と民族の生命を打ち込んだものでなければならぬ。

國是は、國家目的を規制するものであるから、これが確立されて始めて、國家目的も明瞭となる。戦争は、一つの國家目的を追究する力的手段である。この手段は、國是によつて規制せられねばならない。無名の師を起すこと、古來戒められてゐるのは、大義名分を持たないからである。大義名分とは、確乎たる國是によつて、指導されてゐることがある。戦争が無名の師でなく、大義名分を持たねばならないといはれるのは、二つの理由がある。その第一は、それによつて、國家の全構成員を戦争に對して、忠誠ならしめ、これに協力せしめるためである。第二は、戦争の長期化する場合、國家的、従つてまた國民的團結の強靱性は、このことによつて、發生するからである。世界の諸國においては、なんらかの意味において、國是を持つてゐるであらう。たゞ、その國の歴史的發展と、その國の置かれてゐる地位の如何に従つては、國是に眞實性を缺き、輕薄性を持つものもある。さういふ國家は、

戦争に際する場合、戦況の如何に従つて、國是の批判が、國民の間に起り来る危険性が存在するし、またさういふ國家的思想の輕薄性によつて、養はれた國民思想は、動搖の高い公率を持つてゐる。現在の戦争のやうに、各國がそれぞれの意味において、世界觀戦争であると考へ、その世界觀の闘争を戦争の一つの重要な部面として用ゐる場合には、思想戦の犠牲たり易いものである。さういふ國においては、世界觀の再検討、従つてまた再建が要請される。

國是の理論體系としての國家思想が確立されてゐる場合、思想戦の防壁は、一應出來上つたといはねばならないが、思想戦も一つの戦闘を形成するものであるから、敵側における強力な批判または攻撃が行はれないとも限らない。たとへば、米英側においては、既に戦後の對策をとり上げて、樞軸側に對する思想攻勢を行つてゐるがごとくである。かくのごとき場合においては、この重大性に鑑みて、樞軸側においても、最も適切な思想としてのその具體的對策を對置すべきであらう。現にわが國のごときは、對華新政策において、從來米英等が侵略的目的をもつて採用し來つた對華政策を廢棄し、新しい政策をもつて、これに臨んでゐるのであるから、これを擴充し、併せて、わが日本の世界に要求するところを堂々理論的體系において公表するところがあるならば、單に思想戦といふやうな立場のみからではなく、世界を指導する力となるかも知れないのである。

國內における思想の確立は、以上のやうな性格を持つものであるが、確立の過程においては、いろいろの思想の批判統一が問題となる。殊に現在の國家の立場と矛盾するやうな思想が存在するとき、その是正は、最も肝要である。この場合、一般的に思想統一の方法として考へられることは、教育指導である。それは、國內思想戦の意味を持つものであるが、思想戦の「戦」を強調することによつて、ある種の思想の掃蕩・打破・擊滅を期することは、國家

的立場として、當然であるが、政治的方法としては、最も賢明であるとはいひ得ない。それが不幸にして同胞によつて懷かれてゐる場合、教育と指導とが、まづ第一の是正方法でなければならぬ。従つて、その場合、一般の思想への教育といふ見地から、または、一般思想への影響への考慮を必要としないといふ見地からは、思想的論戦を展開することも、よいであらう。さういふ思想的論戦の趣旨は、教導にあるのであつて、威壓や壓迫にあるものもなく、また個人的攻撃にあるものでもない。このことは、國內思想戦の場合において、最も注意を必要とするものである。均しく同胞であり、國家の構成員であるといふ根本事實を忘却することなく、これを導くことが肝要である。さういふ謙虛の立場に立たない限り、被批判者は、批判者をもつて、獨善的・獨斷的でありといふであらうし、また高壓的権力的であると感ずるであらう。ときとして、思想對策と稱して、他に對して大聲叱咤してゐる個人をみかけるのであるが、かくのごときは、單に反感をそよる結果を招くに過ぎないであらう。而して、自分のみを宜しとし、他を低級者扱ひにすることは、獨善者の常に陥る缺陷であるが、それらは單に國民中の一致を亂す効果のみしか持たない場合がある。指導者または自ら指導者をもつて任ずる人達の警戒しなければならぬところである。

教育指導によつて、國內思想の確立が行はれたとき、思想戦の體制は、その根本が確立されたのであつて、思想戦力——重大な精神的戦力——が形成されたのである。思想戦備が出來上つた譯である。このとき、思想戦の第二段階へ動員することが出来る。第二段階とは、(一)防衛的思想戦としての敵國思想攻勢に對處することであり、(二)積極的思想戦として、敵國思想の崩壊を目標とする本格的な思想戦の實行である。

第二段階の第一の敵國思想攻勢に對處する場合は、國內思想體制の確立によつて、防衛體制が樹立されるのであるから、この場合には、武力戦における遭遇戦と同じく、個々の場合の攻勢に對處することである。思想戦として

本格的なものは、国内的體制の確立に對する敵國思想崩壊工作である。このことは、次のごとき事項を包含する。

- 一、敵國思想の全面的批判である。この場合、自國における思想體制が、最も堅固な基礎の上に置かるべきは、ふまでもない。批判の基準が、こゝにあるからである。この基準の下に、敵國の思想に對して假借することなく、合理的批判を下すのである。それは、單なる罵詈譏諷であつては、思想戦の意味をなさない。それは國內における獨り高しとするもの大聲叱咤以下のものでして取扱はれるであらう。この場合、最も必要とするところは、敵を知り、己を知ることである。思想も、毫も武力戦と異ならない。不發彈は、効果のないものである。
- 二、第一は原理的なものであるが、これに對して第二は、實際的な方面に關する思想戦である。敵國の國家の急所を衝くことによつて國民に衝動を與へるにある。敵國の缺陷の指摘である。次に、敵國民が既に潜在的に不平不満を持つ場合においては、それを明確に指摘し、續いて、その不平不満の合理的根據を提供し、敵國內體制の弛緩を誘引する戦法である。

これらは、思想戦の最も重要部分を占めるものである。たゞ、以上の論述によつて、明瞭であるやうに、思想戦は如何なる場合においても、思想的明快性を持たねばならないことである。思想は、信仰の上に立つ場合もあり得るが、それを思想戦の用具として用ゆるときは、その信仰は單なる直感感情の形態においてではなく、明快な論理の形態または事實性の形態において、表現されることを必要とするであらう。さうでないならば、思想戦は、その人の獨りよがり墮することとなるであらう。警戒すべきことである。

要するに、思想は、戦争における精神力の増強であるから、さういふ形態において、養成せられ、指導さるべきものである。また思想戦は、武力戦における電撃戦のごとき効果を持ち得ない。一步一步、一彈一彈の地味な効果

しか擧げ得ないのであるから、その戦ひは持続的でなければならぬ。それは、すべての思想の存在性格であるからである。

二二

戦力としての人的・物的組織的・精神的要素を論じたのが、以上であるが、それらと著しく異なるものとして、こゝに擧ぐべきものは、戦力としての自然である。これは、人間の力において、多くの場合如何ともなし得ないものである。勿論最近における技術の進歩は、徐々にこれを克服しつつあるのは、事實である。交通機關の發達、殊に内燃機關による船艦の航行は、大洋を自在の交通下に置いてゐる。鐵道・自動車の發達は、廣漠たる大陸の進軍を可能ならしめてゐるし、航空機の進歩は、行進の速度を著しく増加すると同時に、防壁としての重疊たる山嶽を越へて、深く敵國內に攻撃を加へる可能性を持つに至つた。しかもなほ、現在の技術の状態においては、自然は、これを持つものに對しては、一つの防壁たるの役割を演じてゐる。

戦争は、行動だからである。ナナの戦争理論家エデュアルト・パンゼは、地理的現象だといつてゐるが、攻勢者にとつても、防衛者にとつても、このことは事實である。戦場が海上に置かれるにしろ、また陸上に存在するにせよ、戦ふものはこの地點にまで到達しなければならぬからである。

エデュアルト・パンゼの理論は二つの内容を持つてゐる。

第一、戦域としての領域である。戦域の面積は國の廣さである。一國が廣大な面積から成立してをり、その中に、一定の人口量とこれらの集團の持つ社會的發展が相當のものであるとすれば、その自然的要素は、大きな防衛障壁たり得る。勿論、征服當時のアメリカ・インディアン族とヨーロッパ諸民族のやうな社會的發展の程度の相違では、

自然も何等の防壁たり得ないが、かくのごとき顕著な差違のない場合には、自然の障害を防禦力として計算しないことは危険である。地形、氣候などの要素も計畫さるべきである。峻嶒な山脈、原始的山林、酷暑暑熱の氣候、傳染病源の存在などが、これである。このことは一國の海岸から二千哩、三千哩への奥地への根據地の設定が、大きな自然的防壁を建設したことを意味するし、氣候的には、『冬將軍』などの言葉によつて現される嚴酷なものは、同じく一つの自然的防壁を形成する。

第二、戦域に常に伴ふ概念であるが、本國の前進基地から戦域にいたるまでの距離である。このことは、戦闘能力は、戦場への距離の自乗に逆比例して發現せられることである。これは、主として兵站線の問題である。現代のやうに汽車、汽船、自動車、航空機の進歩した時代にあつては、これらのものが存在しなかつたときよりは、戦争可能の距離は増大してゐる。しかも現在の戦争のやうに激烈な消耗を伴ふ場合には、交通量の方面から距離が問題とされるのである。

現在の戦争は、かゝる戦域と距離の自然的条件によつて影響されるところが、甚だしく大である。樞軸國においても、反樞軸國にあつても、船舶、航空機の問題が焦眉の急を告げてゐる。何れも其増産に懸命の努力を拂つてゐるのは、このためである。

大東亞戦争において、わが日本は戦略的に優位な據點を占めてゐる。太平洋における敵據點の占領は、このことを示してゐる。戦争の直前米英は、わが日本に對するA B C Dの包圍陣の形成を誇大に宣傳したのであるが、この包圍陣が、殆ど完全に撃破された。

しかしながら、現在の段階において、敵米英はわれに對する包圍陣を完全に失つたとみることが出来ない。敵の包圍陣は著しく後退してゐる。グッチ・ハアバア(アリューシャン群島)——パアル・ハアバア——マニラ——シンガポール——重慶と結んでゐた包圍陣は、東部において、ウエーキ島、西南部において、香港、フィリッピン、マレー半島、ビルマ、東印度諸島の占領によつて、著しく後退してゐる。わが東京を中心として最小二千哩の半徑をもつて描いた太平洋の水域は、わが制空、制海の權下にある。

アメリカ合衆國の西部基地——サンフランシスコおよびサン・チャゴを起點として西へハワイの、パアル・ハアバアがある。パアル・ハアバアから北にミッドウエー、グッチ・ハアバアの線がある。西南に米領および英領諸島を通じて、オーストラリアに向ふ線がある。アメリカ——オーストラリア線ともいふべきものだ。前線上のソロモン群島において、わが占領地から南に延びる線とほぼ直角に、戦火が交鎖されてゐる。ガダルカナル島がこれである。オーストラリアから北上してインドに達する線は、インド洋の中を通ずる路線であるが、東印度、馬來半島、ビルマを制壓された敵は、この路線の安全を期することは容易なことではあるまい。

しかしながら、これらの據點に重慶を加へて、現在においても、日本に對する包圍陣形の殘骸を持つてゐるだけには、たしかである。この包圍陣は、今日においては、最早A B C D包圍陣のやうに、經濟的意義すらも持つてゐない。A B C Dの包圍陣は、經濟戦争の意味を持つてゐただけに、わが國によるその克服は、わが國にその有する經濟力のある程度まで與へたことになる。その外側に形成されてゐる米英の陣形は、わが國に對して海空のゲリラ的戦術によつて消耗を促進させようとするものである。かれらが、潜水艦戦術を誇稱し、東京空襲を宣傳してゐるのも、その目的は、こゝにあるであらう。そのことは絶対不可能なことでないことは、わが當局もこれを認めてゐる。われわれは、これに對して充分の準備を必要とする。

いま、かゝる見地からわが日本の現在置かれてゐる地位をみよう。日本邊周における敵最大の根據地は米本土である。米本土はアラスカのアリユウシヤン群島からカナダに及び、更にワシントン州、オレゴン州、カリフォルニア州に續く、太平洋東岸を形成する。その前進基地は、東北部においてはアリユウシヤン群島のグッチ・ハアバアである。東京を起點として、グッチ・ハアバアまで二二六五八哩である。中央部の基地はサン・フランシスコ並にサン・チャゴである。その前進基地がハワイの眞珠灣である。さらにミッドウェー島である。

サンフランシスコ——眞珠灣 二〇九二哩

サンチャゴ——眞珠灣 二二七八哩

眞珠灣——ミッドウェー 一一一四九哩

米本土から眞珠灣へ二千餘哩ミッドウェー島へ三千二百餘哩である。この最前線から東京への距離は、二千二百五十哩である。わが本土へ最も近いウエーキ島(大島島)は千七百四十哩である。ウエーキ島から眞珠灣までは二千四哩である。

そこで、グッチ・ハアバアからわが東京へは、二千六百五十八哩であるから、東太平洋方面から日本への最短距離は、ミッドウェーの二千二百五十哩である。更に、西方をみれば、第一に支那大陸がある。蔣介石軍の根據地は、日本への反樞軸軍陣營における最短距離であるが、蔣介石軍は、二つのものを持つてゐない。その一つは海岸線であり、他の一つは、航空條件である。在支アメリカ空軍は三、四百機の戦闘機、爆撃機を持つてゐるが、わが日本への攻撃を可能ならしめる爆弾、燃料の輸送路に大きな困難がある。第二は、インド方面である。昭南島までも、海路二千九百五哩に及ぶ。この方面からの直接の航空は、不可能である。南の方面は、ソロモン群島に近い、ラボ

ールまで既に二千五百五十哩であり、オーストラリアのシドニーまで行けば、四千三百七十五哩の遠路である。

これを大観すると、わが日本の周邊約二千哩以内においては、敵の使用し得べき航空基地は存在しない。支那大陸の重慶側は、これよりも近距離であるが、前述のやうな次第である。だから、われわれにして、この距離的防壁を完全に維持すれば、わが本土に對する攻撃は容易のことではない。

戦力の發揮における原則は一層このことの容易でないことを示してゐる。戦力の發揮は距離の自乗に反比例するといふべきである。戦線への距離の大小は、他の條件において均しいものとすれば、戦力の大小を示すものである。同じく三千哩の距離の航路線を持つものとすれば、それは一対一であるといひ得る。しかるに、一方が二千哩、他方が四千哩の航路線を持つ場合には、輸送の關係において、後者が甚しく不利である。

いま日本に對米英の戦争において、對英海戦において、ベンガル灣を戰場とすれば、英本土のプリマスから、約七千哩であり、わが九州の港から三千五百哩であらう。オーストラリアのシドニーとすれば、英本土から一一、二〇〇哩の距離を持つてゐる。對米海戦において、東太平洋においては、ミッドウェーは、米本土と日本本土とのほぼ中間に位してゐる。南方太平洋においては、アメリカからの距離は、わが距離に比して、著しく遠い。しかも、この對米海戦において、わが艦隊の持つ便宜は常に、内線作戦であることである。その行動は、圓の中心から一定の半徑をもつて足りるしかるに、アメリカ海戦の行動は日本海戦の勢力の分散または消耗を策するためには、常に、かゝる日本の行動半徑の圓周をはるか西方から、東方へかけて行動しなければならぬといふ點に、行動半徑の巨性が隨伴してゐる。このことは、空中戦についてもいひ得るところであつて、行動半徑の大きさが障害をなしてゐる。それを克服するための太平洋上から日本爆撃の後、支那大陸にいたる行動半徑の短縮においても、既に失敗

してゐる。

このことは、陸上においても、いひ得ることである。獨ソ戦において、ドイツが強力な力を持つにも拘らず、その結末に容易に達し得ないのは、第一にソ聯領土の廣大な面積を持つことである。この廣汎な領域の上に、多量の人口とウラル山以東のウラルグズネツ地帯の攻撃圏外のとらへ持つ經濟戦力があるからである。第二には、ソ聯領の持つ氣候である。ソ聯領の氣候、殊に寒暖は、ノールウの海岸を北流して、ナルヴィックにまで達するメキシコ暖流からの距離によつて決定されてゐるものとことである。而して、この酷寒は、特にかゝる氣候に慣れてゐないものにとつては、行動の困難をすら感ずる。ドイツ軍はこの困難を克服しなければならぬのである。かゝる氣候と領域とを有つソ聯は、自然的防壁を持つものといふことが出来よう。勿論、これを克服することは絶對不可能ではない。相對的困難であり、巨大な戦力は、これを克服することが出来るに至るであらう。

すべて戦力としての自然は積極的なものではなく、防壁としての役割と價値とを持つに過ぎないのであるから、これに過大な評價を與へることは慎まなければならぬ。自國の持つ自然力は、これを計算外に置き、敵國に存する自然的防壁を考量することこそ、慎重な態度といふべきであらう。

以上の戦力論は、戦力を靜態的に觀察したものであつて、これを動態的に如何に組織するかは、別の機會において論ずることとして、こゝに筆を擱く。(昭和十八年五月十七日稿了)

統制經濟における計畫

氣 賀 健 三

第一節 國家的經濟計畫

第二節 經濟計畫の伸縮性

第三節 計畫の經濟的基準

第四節 國家的欲求判斷の經濟的合理性

第五節 國家的欲求の生産性

第一節 國家的經濟計畫

現代の統制經濟が構成的であるといふときは、その特質として、當然一定の全體的計畫性を備へてゐなければならぬ。全體的計畫性のない統制經濟は決して構成的といふことができない。而して構成的・計畫性といふことは更に、當然一定の目的を念頭においてゐるものであることを要する。即ちある特定の方角に向つて國民經濟を指導しようとする意圖を持つてゐるものでなければならぬ。

現實の歴史的經過において、國家の積極的な全體的計畫性を俟たずして發展せる國民經濟から、今日の世界各國